

京極読書新聞 <第57号>

発行日 平成26年 6月1日(日)
京極町生涯学習センター湧学館

憧れの京都へ-『平家』の史蹟を巡る旅を終えて-

『平家物語』を読む会 村山功一

開講以来の懸案であった“『平家』の史蹟を巡る旅”を終えることができました。ここに至るまでの紆余曲折はすべて省略して、2泊3日の報告をしたいと思います。

■第1日(5月14日)

9時京極町バスターミナル集合し、11時45分千歳発。14時15分関西空港着。全員元気。早速、京都クローバー会(個人タクシー協会)奥田雅夫ドライバーのジャンボタクシーで京都を目指す。薄曇り、思ったほど暑くない。



▲後白河天皇御陵前で記念撮影(2014.5.15)

■八坂神社



16時過ぎ京都に入る。今旅行の記念すべき第1号の見学地は、かの有名な「八坂神社」。この境内にある“忠盛燈籠”

と“祇園女御屋敷跡”は『平家物語』の原点ともいえる重要な場所。平家一門繁栄の端緒となった平忠盛の武勇と、清盛の母とされる祇園女御屋敷跡と供養塚は、私たちにはまさに必見の地です。

“忠盛燈籠”はすぐに見つけましたが、祇園女御の方はやや離れた所だったため、なかなか見つかりませんでした。有名な“しだれ桜(もちろん花は散っていました)”を見ながらしばらく歩くと、観光客もまばらな一角に、やっと祇園女御供養塔を発見。隣接する建物は資料館になっている



ようですが、すでに閉館していました。残念ながら今日はここまでです。駐車場に向かう途中、古めかしいが立派な楼門が建っています。八坂神社は四条通りに面した鮮やかな朱塗りの西楼門が有名ですが、実は正門ではなく、正門はこの古めかしい南楼門なのだそうです。

■第2日(5月15日)

曇り。午後雨の予報。涼しい。

8時30分。今回同行してくれる鹿児島大学名誉教授大谷先生到着。続いて、ガイド役を兼ねて同行する黒滝さん(毎年私たちの会で“黒滝レポート”をしてくれている)も到着。

今日は“葵祭り”に当たり混雑が予想されるので、これを避ける計画を立てていましたが、由緒ある(起源は6世紀にさかのぼると伝えられる)“葵祭り”はぜひ見ておくべきとの京都人のアドバイスがあり、祭り行列見物を加えて大幅に予定を変更する。

<第57号～第58号にかけて特集します>

■清閑寺

9時出発。「清閑寺・高倉天皇御陵」へ向かう。高倉天皇に愛されたことにより、清盛の怒りをかって追放された小督(こごう)が、高倉天皇崩御(ほうぎょ＝天皇が亡くなること)ののち、その御陵の側にある清閑寺に入り生涯その菩提を弔ったと伝えられています。

緑濃い境内には

かなめいし

“要石”という2メートルほどの石があります。この石の上に立つと、眼下に京都の街並みが扇形に広がって見えると



ころから、扇の要に当たる石との意味です。ここから眺めるとほぼ正面に“京都タワー”が見えます。当時はこのあたりに広大な清盛の西八条邸があった地域です。清盛に追われた小督は、どんな思いでこの景観を眺めていたのでしょうか。そんな歴史のロマンを感じさせる佇まいでした。

同じ境内には、西郷隆盛が清水寺の住職の月照上人と倒幕の密議をした「郭公亭」という茶室跡もあります。京都には、幾層もの歴史が積み重なっていることを実感しました。

■正林寺

次に向かったのは「正林寺」。平家一門の邸宅群六波羅と、院の御所法住寺殿との中間付近に位置するこのあたりは、小松谷といいます。清盛の嫡男内大臣重盛の屋敷があった場所です。重盛を“小松内府(内大臣の唐名)”“小松殿”などと呼ぶのは、この地名に由来します。《忠ならむと欲すれば孝ならず……進退ここに窮まれり》と父と法皇との関係で苦悩を重ねた重盛の住居が、平家の象徴六波羅と御白河院の象徴法住寺殿との中間に位置していることも、興味深いことです。

立派な山門をくぐって境内に入ってビックリ仰天。ここの境内は保育園だったのです。子どもたちの邪魔をしないように、ぐるりと一回り。あち



こちに重盛ゆかりの石塔などが散見されましたが、重盛邸の面影はありません。「正林寺」そのものは重盛の菩提寺ではなく、応仁の乱で類焼したものをこの地に移築したもの。

本堂に入ると立派な内陣仏壇の柱上部に“九条関白兼實公”と墨書きされた紙が下がっています。実は、史料としても価値の高い『玉葉』という日記を遺した藤原兼実も、平家滅亡後にこの地に別荘を建てたところでもあるのです。



次の見学地「法住寺」へ向かう途中、「方広寺」の巨大な(日本一といわれる)梵鐘を見学。後年、徳川家康が主筋の豊臣秀頼を滅ぼすきっかけとなったのが、この梵鐘の銘文“国家安康君臣豊楽”でした。ちょっと寄り道でした。



■法住寺

「方広寺」の鐘楼から豊国神社前を通り、後白河天皇陵の裏手から細い道を通して「法住寺」正門に至る。そこは修学旅行生が長蛇の列をなしていました。しかし、その列はみんな向かい側の門の中に吸い込まれています。そうです。そこは“超”有名な「三十三間堂」なのです。私たちが訪ねる「法住寺」と後白河天皇御陵は、道路を挟んだ向かい側です。正門前には私たちのグループだけでした。平安末期のこのあたりは、広大な院(引退した天皇)御所であり、その一角に平清盛が院のために寄進した寺院が「蓮華王院(三十三間堂)」です。

寿永2(1183)年、後白河院と衝突した木曾義仲による“法住寺合戦”で殆どが焼失し、わずかに三十三間堂とその周辺だけが焼け残ったといえます。残念ながら「法住寺」も後白河天皇御陵も拝観できなかったが、御白河院が愛唱した今様の一節〈あそびをせむやとうまれけむ〉が刻まれた石碑を写真に収めました。



■六波羅蜜寺

ここから北へ少し行くと「六波羅蜜寺」に着きます。六波羅はもともと葬送の地であり、人の住む地域ではなかった。当時身分卑しい者とされた武士であった平忠盛が居を構えたのが始まりという。その理由はよく分からないが、一説に都の貴族社会が持つ様々なしきたりや因習から距離を置き、武士としての自由を求めたのではないかとともにいわれています。以来、平家一門の栄達に伴い発展を続け、最盛時一門・一族の邸宅5千を数えたといわれています。^{ろくはらよう}“六波羅様”というファッションが、都の人々を魅了したとも。

現在の「六波羅蜜寺」の南側一帯が平家邸宅群跡といわれますが、今、すぐ前には小学校があり、近代的なマンションが立ち並んでいます。

『平家』では、一門都落ちに際し、すべて焼き払ったとありますが、当時の「六波羅蜜寺」は焼け残ったといえます。現在では本堂と弁天堂、地藏堂そして収蔵庫(現宝物殿)だけがあります。

境内に入ります、清盛塚の写真を撮り宝物殿へ。ここに収められた宝物の第一は、開祖空也上人立像、平清盛座像です。さらに、重文クラスの彫刻多数が陳列されています。巨大な閻魔大王像、女性の長い髪を左手に持つ珍しい地藏菩薩立像(「かつら掛け地藏」)、有名な仏師運慶、湛慶座像など、教科書や写真集でしか目にできないような貴重な彫刻群に圧倒されました。



■葵祭り

時間は11時近くなり、葵祭りの行列も下鴨神社に近づきつつあるとのことで、川端通りを北上します。進むにつれて交通規制が多くなり渋滞。歩道も人の波という状態で、雨もパラつきははじめます。しかし、ベテランドライバー奥田さんの腕は冴え、交通規制箇所を巧みに避けて行列が見られる場所に停車。さすがです。行列はすでに後半でしたが、それでも女房装束の女性や神人風の男性の姿、真っ黒い牛に引かれたあでやかな牛車(ぎっしや)などを見ることができました。はからずも間近に見た王朝風俗に、大興奮でした。



■嵐山、嵯峨野

昼食ののち、今回の京都ツアーでは最も遠い嵐山に向かいます。昨年の台風では桂川が氾濫し、渡月橋の流失も心配されました。テレビで連日放映された水浸しの旅館や土産物店も、すっかりきれいになり被害の跡は見られません。嵐山、嵯峨野は『平家』を彩る女性達が隠栖(いんせい=世間の眼をのがれて暮らすこと)した地です。

まず小督です。高倉帝の寵愛を受けたことによる清盛の怒りを察知し、彼女は自らこの嵯峨野に隠れ住みます。しかし、程なく帝の命を受けた源仲国により探し出され、再び内裏に戻り匿われる。やがて、清盛の知るところとなり、追放されます。「清閑寺」に入るのは、その後のことです。ここ嵐山、嵯峨野、亀山一帯には小督にまつわる伝承や史跡がたくさんありますが、今回は道路脇に建つ「小督庵跡」という石碑のみの確認に終わりました。

もう一人の女性は祇王です。白拍子(男装で歌い、舞う芸人)の祇王は清盛に愛され西八条邸で暮らしていましたが、ある時仏御前という若い白拍子が西八条邸にやって来る。その美しさと歌、舞いの巧みさに心変わりした清盛は、祇王を追い出し仏御前を留め置きます。悲嘆にくれた祇王、妹の祇女そして母のどちは嵯峨の奥なる山里…に庵を編むことになります。やがてそこに世の無常を悟った仏御前も髪を落として訪れ、4人一緒に暮らした……というのが『平家』(巻一「祇王」)です。その庵の跡に建つのが「祇王寺」です。



■祇王寺

雨足が強くなる中、あの有名な“竹林”の道を通して「祇王寺」に向かいます。空を覆い道の両側に密生する竹林は、まさに圧巻です。うっとりから見入っている間に、車は「祇王寺」山門下に到着です。境内の木々と庭を埋め尽くす苔が、雨に洗われて鮮やかな緑の世界です。



秋には木立も庭も真っ赤に染まるとのこと。「やっぱり秋に来なくちゃ」とは、ドライバー奥田さんの言葉。

江戸時代後期以降荒廃していたのを、明治になって再興されたものが現在の建物ということです。本堂に上がると左手が仏壇になっており、向かって左からとち、祇王、清盛、祇女、仏の像が安置されています。それにしても、彼女たちにとっては「憎っくき清盛」の像が、なぜ一緒に安置されているのか、ちょっと不思議に思えました。次の部屋にはテレビのCMでも有名な“吉野窓”と呼ばれる丸窓があります。障子を閉めると斜めに組んだ格子の影が映り、光の具合で色が変わるところから“虹の窓”も呼ばれています。現在は尼寺ということもあってか、あるいは祇王物語の魅力からか女性の参拝者が圧倒的に多いということです。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

■首途(かどで)八幡宮～西陣織会館

再び洛中に戻り、西陣を目指します。“応仁の乱”の際、山名持豊(宗全)率いる西軍が本陣を置いたことが地名の由来。今では織物の街ですが、このあたりに住む人々は今でも山名宗全の“味方”なのだそうです。さすが、京都です。

「西陣織会館」の前に立ち寄ったのが、

「首途八幡宮」。街の中にあるほんの小さな神社なのですが、これがすごい。伝承によると鞍馬山から金売り吉次に伴われた牛若丸(義経)が、奥州への道中安全を祈願した神社ということです。狭い境内には「源義経公奥州首途之地」と刻まれた石碑がありました。現在も旅の安全を祈る神社として、信仰されているとのこと。



「西陣織会館」は、「首途八幡宮」のすぐ側です。予定変更のため閉館まで30分しかありませんが、伝統文化西陣織のきらびやか美しさや、本物の持つ重厚さなどを感じることができました。機織り実演は見ることはできなかったのですが、省略せず見学できただけで満足でした。

<第58号へ続きます>

